

ひと

ど のう 土嚢で途上国の農道80キロを直した京大教授

木村 亮さん(53)

土嚢で道を直すんです。この袋に石ころや土を詰めて、しっかりと結んで、こうやって地面に一つ一つ並べて踏み固めてーー。

途上国に出向いて説明しても、最初は信じてもらえない。「二ツポンの大学教授が来るって聞いていたのに」と困惑されることも。

雨期になると凸凹で通行止めになる農道を直すNPO法人道普請(みちぶしけん)の人を率いる。7年の実績はアフリカとアジアの15カ国で計80キロ。実演がものをいう。悪路に数百個の土嚢を並べ、いったん去るとすると住民から「また教えて」と呼ばれる。再訪すれば、たいてい道は延びている。農作物を賣るため街の市場に運びたい農民たち。土嚢の耐久性を知れば、見よう見

まねで道を直し始める。

最初はケニアが認めた。公共事

業大臣が出迎え、地元紙が「dō

—nōu」を特集。アジア開発銀

行からはパプアニューギニアの事業を受注。6月に横浜であるアフ

リカ開発会議ではブースを出し、活動を紹介することになった。

専門は土木工学だが、「簡単な技術でも人々を幸せに」との恩師の言葉が転機に。試行錯誤し、土嚢にたどり着いた。袋は一枚25円ほど。土と石は拾う。道1kmを直すコストは500円と、アスファルト舗装の10分の1以下だ。

先進国の支援なしで道を直せる若者は地元の人気者になる。「ヒーロー育成が楽しい。教授つぱいでしょ」

文・写真 金成隆一

